
4 . 妄想学園松木とうた

小野チカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4・妄想学園松木とうた

【Nコード】

N0322Z

【作者名】

小野チ力

【あらすじ】

妄想学園にいる一組の恋人たちのお話。

妄想学園は本日23時まで、一時間一話ずつ公開中

先輩と私は、付き合って三年になる。

それは遡ること、桜が舞い踊る中学校の入学式。
その頃から暴君と名高かった外岡先輩のグループにいる、控えめな先輩に私が一目惚れをしたことからじまった。

「好き」という言葉を三十回くらい言ったところで先輩が、
「好きの安売りをしない方がいい」って優しく諭してくれた。

そうだなあ、と思つて、今度は、
「大好き」という言葉を三十回くらい言った。そしたら先輩が、
「大きいを付けたところで、あまり変わらないよ」って教えてくれた。

好きよりも、大好きの方が気持ちがいっぱい込められている気がしたけれど、

先輩には通じなかったみたい。

だから今度は、
「愛しています」って伝えた。
「気持ちが重い」って言われ続けた。

「結婚してください」って言うつと、
「うつつしい」と言われた。

いつも通り休み時間の度に顔を出していた私は、お友達から猛者

と呼ばれていた。

普通は、他学年の、しかも二つも上の先輩の教室に、一人で乗り込むことってすごく勇気があるみたい。そんなの、先輩を見るだけで毎日幸せな私にとって、障害にもならなかった。会いたかったら、会いにいけばいい。

例え男子トイレに逃げ込まれても、体育の前で着替え中だっても、もし妄想学園に入ってた頃だったら、コル・先生も一緒に覗いてくれたかもしれない。以前覗こうと思ってドアに手をかけた時、コル・先生と手が触れ合ったことがあったもの。

外岡先輩に“松木のフン”と言われながらも、私はずっと先輩のことを追っていた。

高校だって、先輩と同じところに行くために、必死で勉強したんだもん。

そんな関係が、一年続いた頃、気がつけば私と先輩は付き合ってた。

好きとも、愛してるとも、結婚してくれとも言わなかったのに、それは突然やってきた。

入学して、桜が散り、夏が来て、紅葉が色づき、冬が訪れ、新しい年を迎えた。そして、恋人達のイベントの数週間前。

「ねえ、先輩。チョコレート好き？」

「嫌い」

「じゃあ、ココア好き？」

「砂糖入ってないのなら」

「うーん。マシュマロは？ 好き？」

「甘いもの嫌い」

「ねえ、先輩」

「なに？」

「私のことは？」

「好きだよ」

「もー、先輩って好き嫌い激しい……ってあれ？」

聞き間違いかと思って、雑誌から視線を上げると、先輩はいつもの澄ました顔だった。外岡先輩という時と何も変わらない、笑うと八重歯が覗いて可愛いのに、あまり笑わない先輩。殿は俺様だって嫌そうに言いながら、すごく仲の良い、私の大好きな先輩。

「ほんとに？」

「なにが？」

「先輩、私のこと……」

「好きじゃなかったら、今頃被害届出してる。それくらい酷いって、そろそろ自覚してくれないかな」

そんな会話からはじまった私たちの付き合いは、高校生になっても変わらなかった。

「七不思議？」

お昼の放送を聞きながら……あ、また工藤パパだ。大丈夫なのかな、幽体離脱しすぎると、元に戻れないって聞いた事があるけれど、最近よく代わっている気がする。最後のシメが、

「工藤結花と付き合いたいヤツは、この俺を倒してからにしろ！」

なので、よくわかる。

既に空気と化している私は、先輩の前の席の人から椅子を借りてお弁当を広げていた。外岡先輩たちもいるけれど、外岡先輩たちにとって、私がいることは気にも止めない存在らしい。中学校からずっとこの調子だからなのか、私が先輩のファンだからなのか。

「そう、七不思議。うたは知ってる？」

私の名前は歌歩^{かほ}と読むのだけれど、先輩はうたって言う。そう呼ぶのは先輩だけ。
だから私は、うたって呼ばれるのが好き。

「用務員の有働さんが、ウシって呼ばれてる理由とか？」

「……黒毛和牛からだろ。そんなの、周知の事実だ」

「んー、もり学園長の背がまだ伸びてること？」

「まじで!？」

「うそだろ!!」

先輩と外岡先輩は驚いていないのに、他の先輩達は驚いている。

「うた、それは七不思議じゃなくて、単に朝身長計ったから」

「そうなの？ 髪が元気になった証拠だって、もり学園長喜んでたのね」

つままないと言いながら、かにさんウィンナーをつつく。

フォークの先が手にあたって、ひとつもげて落ちた。

「七不思議、一年ではまだ聞いた事ない？」

「んー、そんなに話題にはなっていないんだよね。コル・先生が、実は日本語流暢とか、首つりの木とか、丹羽先輩に彼女が出来たとかかなあ」

そう言い終わると、大きなお弁当を持った先輩達が次々に立ち上がる。

先輩と外岡先輩は驚いていないのに、他の先輩達は箸を追ってしまっほど驚いていた。

「許せん、丹羽の分際で！」

「くそ、末代まで呪ってやる！！」

「リア充は爆発しろ！」

佐々木先輩が怒りに震えているので、思わずくすくす笑う。

「やだあ、佐々木先輩。爆発したら飛び散った内臓集めるの大変じゃないですか。爆発しそうな人みたら、ちゃんとゴミ袋でカバーしないと駄目ですね。後片付け楽だし」

にこにこ言った私とは反対に、固く口を閉ざした先輩達は次々と箸を置いて座る。

まだお弁当が残っているのに、蓋までしてしまった。

「うたは想像力が豊かだな」

「そんなことないよ。事実だよ！」

微笑んで頭を撫でくれる先輩に、私もにつこり笑い返す。

先輩大好き。うざいって言われても、一度死んで馬鹿を直して来いと言われても、優しいし大好き。ずっと、先輩の隣にいたいな。

「……前から思ってたけど、松木が歌歩ちゃんと付き合ってるの不思議だわ」

「俺も同感。松木って俺らの中で一番普通だよな」

「多分な」

「いや、殿の親友をかれこれウン十年続けている時点で普通ではない！！」

声高々に宣言した先輩達を、外岡先輩は笑顔でチョップしていた。その音が肉同士がよじれる音に似ていて、私はつい楽しくなってしまう。

先輩達は楽しい。

きつとそれは、私の大好きな先輩のお友達だからだ。

「あれ有名だろ？ 尾野先生の偽チチ疑惑」

外岡先輩が黙々とお弁当を食べながら言い放つ。
食べ方もワイルドな外岡先輩のお弁当は、今日も日の丸だ。すてき。

「よせて上げるだけで、そんなにサイズって変わるものか？」

「バカ言え。俺、ねーちゃんのブラみて詐欺だと思ったぞ、あのパッドは騙される」

「馬鹿はお前等だ。サイズが変わるんじゃない、見た目が変わるんだ！」

なぜかおっぱい話に火がついた先輩達は、尾野先生のチチには夢

がつまっているだの、希望がつまっているだのと、楽しみに話をしていた。

「……………夢も希望もつまってるわけないじゃん。おかーさんペチヤだし」

ぼそりと呟いた一言は、本物だ、半分嘘だと議論している先輩達には届かない。

目の前の先輩は、口元に指を添えて、黙っていなさいと目で私を諭した。

尾野 歌歩、十六歳、高校一年生。

どうやら貧乳は、遺伝しないものらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0322z/>

4．妄想学園松木とうた

2011年12月1日20時47分発行